

千葉県八千代市

市内遺跡群発掘調査報告

平成元年度

八千代市教育委員会

本文・図版目次

本文目次

例言

市内全域図	2
第1章 調査に至る経過	3
第2章 各遺跡の概要	4
第1節 下高野新山遺跡の概要	4
第2節 西山遺跡の概要	6
第3節 菅地ノ台遺跡の概要	7
(1) 3号住の調査概要	8
(2) 4号住の調査概要	10
(3) 5号住の調査概要	12
(4) 6号住の調査概要	14
(5) 7号住の調査概要	16
(6) 8号住の調査概要	18
(7) 9号住の調査概要	20
(8) 10号住の調査概要	22
(9) 1号掘立柱遺構の調査概要	24
(10) 2号掘立柱遺構の調査概要	25
(11) 3号掘立柱遺構の調査概要	26
(12) まとめ	27
調査組織表	35

図版目次





図版 1	下高野新山遺跡
図版 12	西山遺跡
図版 13	菅地ノ台遺跡
図版 14	菅地ノ台遺跡
図版 15	菅地ノ台遺跡
図版 16	菅地ノ台遺跡
図版 17	菅地ノ台遺跡

挿図目次

第2図	位置図	4
第3図	グリッド配置図	4
第4図	遺物実測図 (1:3)	5
第5図	遺構平面図 (1:30)	5
第6図	位置図 (1:2,500)	6
第7図	グリッド配置図 (1:1,200)	6
第8図	遺物実測図 (1:3)	6
第9図	遺構配置図 (1:600)	7
第10図	位置図 (1:2,500)	7
第11図	3号住平面図 (1:60)	9
第12図	3号住遺物実測図 (1:3)	9
第13図	4号住平面図 (1:60)	11
第14図	4号住カマド平面図 (1:60)	11
第15図	4号住遺物実測図 (1:3)	11
第16図	5号住平面図 (1:60)	13
第17図	5号住遺物実測図 (1:3)	13
第18図	6号住平面図 (1:60)	15
第19図	6号住遺物実測図 (1:3)	15
第20図	7号住平面図 (1:60)	17
第21図	7号住遺物実測図 (1:3)	17
第22図	8号住平面図 (1:60)	19
第23図	8号住遺物実測図 (1:3)	19
第24図	9号住平面図 (1:60)	21
第25図	9号住遺物実測図 (1:3)	21
第26図	10号住平面図 (1:60)	23
第27図	10号住遺物実測図 (1:3)	23
第28図	10号住カマド平面図 (1:30)	23
第29図	1号掘立柱遺構平面図 (1:60)	24
第30図	2号掘立柱遺構平面図 (1:60)	25
第31図	3号掘立柱遺構平面図 (1:60)	26

例 言

1. 本報告書は、市内遺跡群発掘調査事業として、下高野字新山551-1外に所在する下高野新山遺跡、村上字西山 881 -45外に所在する西山遺跡、荻田字菅地 442 に所在する菅地ノ台遺跡について報告した。
2. 本事業は、国庫補助事業及び県費補助事業として発掘調査を実施した。
3. 発掘調査は、平成元年 9 月 1 日～同年11月 4 日まで、整理作業は、平成元年11月13日～同年 11月22日の期間をもって実施した。
4. 発掘調査及び報告書作成は、森屯哉が担当した。
5. 本書の執筆、遺構及び遺物写真の撮影は森が行なった。
6. 遺構、遺物の縮尺は、下記のとおりとした。
住居跡 (1/50) 掘立柱遺構 (1/50) ビット (1/50) カマド (1/50及び1/100) 遺物 (1/5)
7. 遺構内及び遺物のスクリーントーン等については下記のとおりとした。

遺構	床硬化範囲	鏡 [点線線]
遺物	煤	
	赤彩	
	カマド袖部分 灰	
	須恵器・セシイを含むもの	



第1図 市内全域図

(国土地理院発行 1 : 30,000 在会より転載加筆)

第1章 調査に至る経過（第1図）

下高野新山遺跡は、平成元年5月に医療法人心和会八千代病院理事長荒井元吉氏より施設を増設のため下高野字新山551-1及び551-2番地の2,895㎡について文化財の所在の有無にかかるとの照会が提出された。これを受けて市教委では、現地踏査を実施した。当該地は、栗畑及び荒蕪地となっており現時点においては、遺物の散布状況も不明であるが、隣接地の553番地においては、前年度国庫補助事業として発掘調査を実施し遺構の確認もしていることから、埋蔵文化財について遺跡が所在する旨回答した。その後二者協議により計画変更がむずかしいといった経緯から発掘調査の準備を進めた。照会地については、全城確認調査の必要性があり、当該地の下草刈り及び方眼測量を協力依頼した。その他諸準備が整い、平成元年9月1日～同年9月13日に亘って確認調査を実施した。（分布地図No92）（注1）

西山遺跡は、平成元年7月に加藤三守氏より店舗建設のため村上字西山881-45外にかかる、3,284㎡について文化財の所在の有無にかかるとの照会が提出された。これを受けて市教委では、現地踏査を行なった。照会地の現況は、竹林を伐採した後であり、全面積の約半分については、1m以上の削平を受けている状況であった。当該地については、西山遺跡として周知の遺跡であり土師器の出土も見られる点を考慮し果文化課に副申した。果現地踏査によって削平を受けていない1,400㎡について遺跡が所在する旨を確認し、果回答書を待って、加藤氏に回答した。その後三者協議により設計変更がむずかしいとの事から確認調査を計画することとなった。諸準備が整ったので、平成元年9月16日～同年9月25日に亘って確認調査を実施した。（分布地図No196）

菅地ノ台遺跡は、前年度長岡長信氏より当該地を農業用地として造成したいという経緯から全城の確認調査及び確認した遺構の内住居跡2軒について一歩本調査を行なった。（注2）本年度は、対象予定地の北側部分における875㎡について本調査を実施することとなった。調査に先行して平成元年9月12日～同年9月18日にかけて重機による表土剥ぎを行なった。調査は、平成元年9月26日～同年11月4日に亘って実施した。（分布地図No179）

以上三遺跡が国庫補助事業の対象となり得るか果教育庁文化課に問い合わせ内語を受けたのち各々について協議を進めた。

第2章 各遺跡の概要

第1節 下高野新山遺跡の概要（第1～5図 図版1）

遺跡の立地 本遺跡は、東流する高野川北岸に至る谷津の最奥部の台地上に位置し、標高約24mを測る。前年度の隣接調査地区では、ビット5口、住居跡1軒を確認している。この内、ビット2口については、平成元年4月に本調査を実施している。

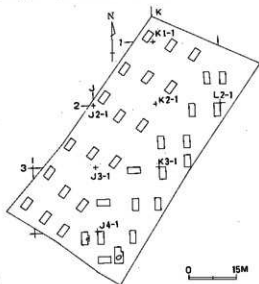
調査の方法と経過 今回の調査地区は、収穫前の粟畑と荒地であったため、前者については、任意にトレンチを設定し、後者は、業者が保持している基準点測量から、トレンチを設定した。トレンチは、2×4mを基本とした。経過は、9月1日～13日トレンチ掘り下げ、9月8日～13日セクション図等図面類作成、12～13日遺構確認トレンチ拡張及び調査、13日現場撤収作業。

調査の概要 遺構は、I4-13グリッドより黒褐色土を主体とする楕円形状のビット、J4-6グリッドより黒褐色土を主体とする長方形形状のビットを確認した。遺物は、K2-7グリッドで30点程度出土しているが他のグリッドでは0～10点程度と密度はうすい。以下、検出遺構と出土遺物について記す。I4-13グリッド検出のビットは、長径70cm×短径45cmの楕円状を呈する。楕円状プランの内側に円形状に更に掘りこんでいる。深さは、22cm程度である。遺物は、確認されなかった。J4-6グリッド検出遺構は、1.3m×1.4mの略円形状を呈する。底面は2段になっており段差は5cm程度である。深さは65cmを測る。遺物は確認されなかった。今回出土した遺物は、1～3が貝殻糸痕文系の破片で、4～7が中期前半の角押文を施す一群である。遺物は量及び種類とも少ない状況であった。

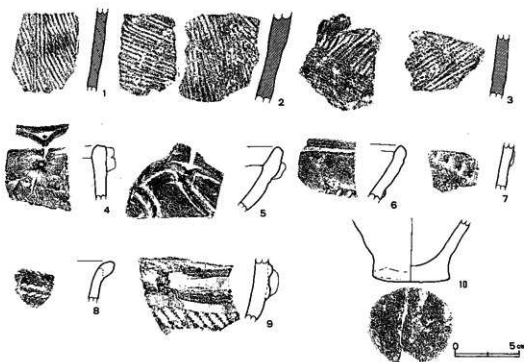


第2図 位置図

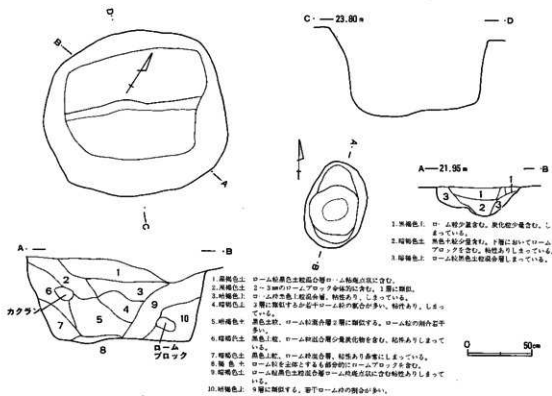
八千代市郡市図より転載加筆



第3図 グリッド配置図



第4図 遺物実測図



第5図 遺構平面図

第2節 西山遺跡の概要 (第1・6～8図、図版2)

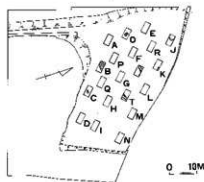
遺跡の立地 本遺跡は、北流する新川東岸に至る谷津の最奥部に位置し、標高約26mの台地上に所在する。同台地上には、現在村上団地となっているが、奈良・平安時代集落跡として著名な村上遺跡群が所在する。

調査の方法と経過 トレンチの設定は、調査区域内を網羅するように、任意の南北、東西方向に10m間隔で方眼杭を設定し、その方眼上に10m間隔に2×4mのトレンチを作成した。トレンチ呼称は便宜的にA、B、C…とした。また幅2m程度の狭長な残存部分は1トレンチとした。経過は、9月16日器材搬入、調査区設定、9月18日～25日トレンチ掘り下げ、22日セクション図作成、25日午後現場撤収により終了した。

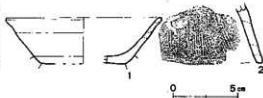
調査の概要 今回確認した遺構は、古墳時代住居跡1軒、平安時代住居跡2軒、時期不明住居跡3軒、ピット3口である。この内1トレンチとBトレンチで確認した平安時代住居跡には、炭化物がフク土中に含まれ火災住居としての可能性も考えられる。確認面は、全てソフトローム上面で行った。掘り込み層は、竹林伐採時において表土を削平しているため不明である。基本層序は、NトレンチにおいてI層表土層、II層黒褐色土、III層褐色土、IV層暗褐色土、V層ソフトローム漸移層、VI層ソフトローム層となる。出土遺物は、小破片のみであるが、古墳時代前期のものと平安時代の上師器、須恵器が多い。ここでは、ロクロ使用の土師器及び古墳時代前期の白付裏脚部(?)片をとりあげた。



第6図 位置図 八千代中都市区より転載加率(S=1:2,500)



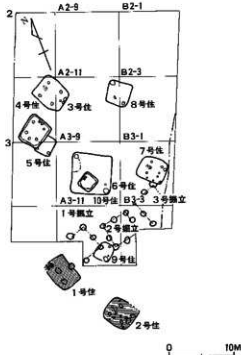
第7図 グリッド配置図



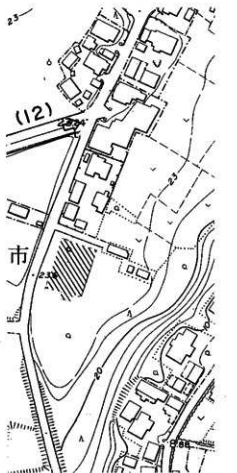
第8図 遺物実測図

第3節 菅地ノ台遺跡の概要

調査経過と概要 今回本調査対象の遺構は、住居跡8軒、掘立柱遺構3棟で平成元年9月26日～同年11月4日にかけて調査を実施した。9月26日現場設営、27日～29日プラン確認作業、29日～10月4日遺構トレンチ掘り、10月5日より3～5・8号住掘り下げ、16日より6・7・9・10号住掘り下げ、その間10月9日～27日3～5・8号住遺物取り上げ、平面図作成等実測、10月20日～11月1日6・7・9・10号住遺物取り上げ等実測図作成を行う。また掘立柱遺構については10月14日より柱痕確認作業を経て半截後セクション図作成、11月2日にかけて全掘、平面図作成を行う。カマドについては、10月30日～11月4日にかけて4・10号住の2基について行った。11月4日に、遺跡内清掃後、遺構全景撮影、現場撤収作業をもって終了した。以下各遺構について概要を記す。



第9図 遺構配置図



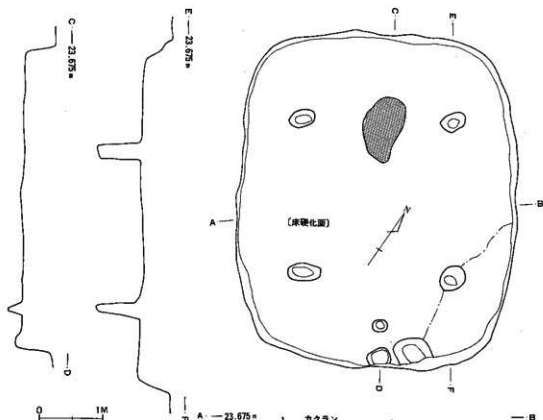
第10図 位置図 八千代市都市図より転載(加筆)
S = 1 : 2,500

(1) 3号住の調査概要 (第1・11・12図 図版3・7)

本跡は、A2-11グリッドを中心に位置する。規模は、5.2 m × 4.2 mの隅丸長方形プランを呈する。遺構の遺存状態は良好である。覆土は、黒褐色土を基調とする自然埋没である。なお主軸方位は、N-54°-Eである。床面までの深さは、54cm程度で、ハードロームを若干掘り下げた位置になる。地床と考える。床は全体的にしまっているが一部南東コーナー部分に軟弱な箇所が見られた。また遺構中央部分の炉の南側では、ハードロームが虫食い状にわずかにくぼめられていた。範囲は2 m四方である。壁の立ちあがりは、ほぼ直立ぎみになっている。柱穴は、主柱穴が4口、副柱穴が2口確認された。前者の深さは、口のみ30cmで他は60~70cmを測る。大きさは40~50cm程度である。各柱穴とも立ちぐされの状況は見られなかった。貯蔵穴と考えられる落ち込みは、南壁中央の副柱穴脇に確認している。規模は40×50cmの長方形プランで深さは20cmを測る。覆土は、暗褐色土(黒色土粒、ローム粒混入)で、脇の副柱穴と類似する層である。炉は北側の2口を結ぶ線上中央にその中心部分が位置する。覆土は、黒褐色土(焼土粒、2~3mm大焼土ブロック全体的に含む)で、皿状にほりくぼめられた底面は、ハードロームが、赤色化している状況であった。

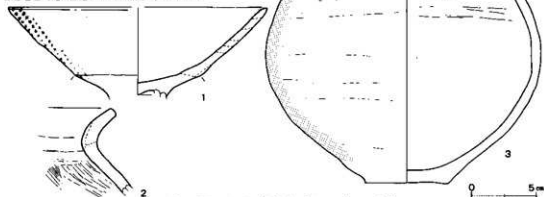
遺物は、全体でも200点を越えない点数である。小破片が多く投棄されたものとする。レベル的にも、30~50cm程度と浮いている。南及び東側からの投棄が多い状況である。特殊遺物としては、壁際より軽石でつくられた浮き子が出土している。以下、個々の遺物について紹介する。

1は、1.2m範囲内に散らけて出土した高坏の坏部である。床から20~35cm程度浮いている。坏部が多少程度遺存している。半転実測での数値は口径19.8cm、遺存高6.8cmである。胎土は、砂粒、長石、雲母を混入する。整形は、内外面ともなでをていねいにおこなっている。また外面に赤彩を施す。非常に明瞭である。2は、壺の口縁部である。胎土は、長石、石英を多量に含んでいる。焼成は若干クッキー状で悪い。整形は、口縁部横ナデ、体部内外面とも刷毛口調整を行う。口縁部がコの字状を呈する。床から31cm浮いた状態で出土している。3は、報文中では、唯一本跡に伴うと考えられる甕形土器である。倒れてつぶれた状態で出土している。床直層より出土。口縁部が全周ないが残存高20.4cm、底径6.2cm、胴部最大径21.3cmを測る。体部内外面ともヘラなどで調整を施す。二次焼成により若干ぼそぼそになっている。体部外面に煤の付着が著しい。また底部内面においてこげて焼けた器面が剝離している状態が見られる。



1. 褐色色土 ローム状2-3mm大程度の赤土粒状物ありしまっている。
2. 赤褐色土 ローム状黒色土粒状物層状にあり、粘りありしまっている。
3. 赤褐色土上 ローム状少量赤土2-3mm大ロームブロック散入しまっている。
4. 褐色色土 黒色土粒ローム粒状物層、粘りあり若干はそばそする。
5. 赤色土 赤色土粒ローム粒状物層状にあり、3-3mm大ロームブロック散入。
6. 褐色土上 ローム粒土体物状ありしまっている。
7. 褐色色土 黒色土粒少量赤土全体散りしまっており粘り性あり。
8. 褐色色土 土質に赤褐色土土粒の割合が多い。
9. 褐色土上 ローム状黒色土粒状物層ローム粒の割合が多い、粘りありしまっている。
10. 赤色土 ローム粒土体黒色土粒少量散入する、2-3mm大ロームブロック全体散りになる。
11. 褐色色土 ローム粒土や赤土を多く含む、若干はそばそする。
12. 褐色色土 赤色土粒ローム粒状物2-3mm大ロームブロック散入しまっている。
13. 褐色土 10層に類似若干ローム粒の割合が多い、しまっている。

第11図 3号住平面図(S=1/60)

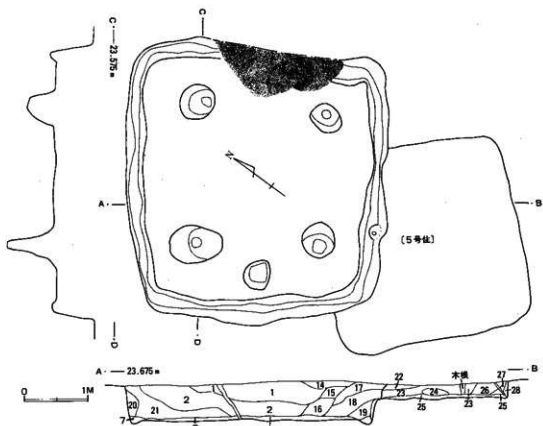


第12図 3号住遺物実測図(S=1/3)

(2) 4号住の調査概要(第1・13~15図 図版3・7)

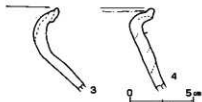
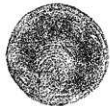
本跡は、A2-8グリッドを中心に位置する。5号住を切って構築している。規模は、4.2×3.5mの南北にやや長い方形を呈する。主軸方位はN-52°-Eである。遺構の遺存状態は、壁立ち上がりの最上部でややカクランを受けているもののほぼ良好である。覆土は、黒褐色土を基調とする自然埋没である。床面までの深さは、56cm程度で、ハードローム面を床としている。床は全体的にしまっておりよく硬化している。壁の立ち上がりは、西壁でややなだらかになるほかは、ほぼ直立きみになっている。柱穴は、主柱穴4口、副柱穴1口、壁柱穴1口である。主柱穴の深さは、60~84cmを測る。大きさは、45~55cmである。副柱穴は、45cmで深さ24cmを測る。各柱穴とも立ちぐされの状況は見られなかった。壁溝は、カマド構築以前に着手しておりカマド袖部の下まで周回していた。断面はコの字状で床面側での立ちあがりやや緩やかである。幅は、16~18cmで深さは、6~8cm程度を測る。カマドは、東壁中央に位置し、淡褐色砂質土混暗褐色土粒を主体的に構築材として使用している。また土台となる部分及び壁面に密着して淡褐色粘土か2~3cm使用されていた。火床部は、明瞭な範囲としては確認できなかった。煙道部は、壁面で120cm壁面から奥に56cm程度山形に掘り込まれていた。また構築の際、袖部の末端部分を安定させるために三角形に鞍部をつくっていた。壁溝は、左袖下まで、右袖手前までつくられていた。

遺物は、全体で500点程度の点数である。小破片が多く投棄されたものと考えられる。レベルは、ほとんどが20~50cm程度浮いた状態で出土している。カマド内より滑石製刻形品が出土している。個々の遺物は、1は須恵器坏で床から24cm浮いて倒立して出土した。口縁部が多少欠損している。数値は、口径14.8cm、器高3.8cm、底径7.8cmである。胎土は、長石、砂粒を含み淡灰褐色を呈する。整形は、体部外面下端において回転ヘラ削り調整、底部は糸切り後回転ヘラ削りを行っている。2は、土師器坏で床から2cm浮いて正立して出土した。約1/2強遺存する。数値は、口径13.0cm、器高3.5cmである。胎土は、雲母、石英、砂粒を混入する。淡橙褐色を呈する。整形は、口縁部横などで、体部内面はなで、外面は横位ヘラ削り調整を施す。器形の特徴は、底部は丸底状を呈し体部中央で弱い稜をつくる。口唇部は、やや直立きみに立ちあがっている。3は、土師器製の口縁部で床から42cm浮いて出土している。ロクロ使用で、胎土は、長石主体に石英雲母を混入している。色調は内外面淡茶褐色を呈する。整形は内外面などで調整を施す。口唇部は、複合口縁となっているが、内側での稜は非常に弱い。4は、土師器製の口縁部で床から57cm浮いて出土している。ロクロ使用で胎土には雲母が多く混入される。色調は、暗茶褐色を呈し内外面などで調整を施す。口唇部は、つまみだしで直立する。



第13図 4号住平面図 (S=1/60)

1. 泥褐色土 暗褐色土白色砂質土上部をロームが少量含む。
2. 泥褐色土 白色砂質土・暗褐色土少量含む。
3. 泥褐色土 白色砂質土を主とし、暗褐色土が少量。
4. 暗褐色土 白色砂質土褐色土が少量含む。
5. 泥褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
6. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
7. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
8. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
9. 暗褐色土 ロームが少量とし、暗褐色土を含む。
10. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
11. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
12. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
13. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
14. 褐色土 ロームが少量とし、暗褐色土を含む。
15. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
16. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
17. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
18. 暗褐色土 褐色土ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。
19. 褐色土 ロームが少量含む。少量の白色砂質土を含む。

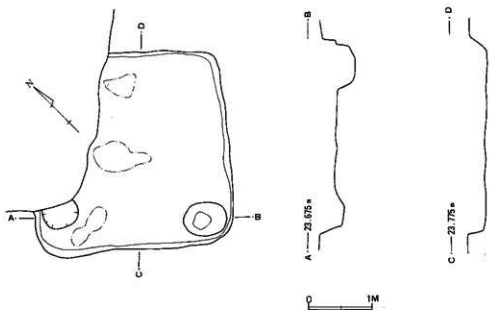


第14図 4号住カマド平面図 (S=1/60) 第15図 4号住遺物実測図 (S=1/3)

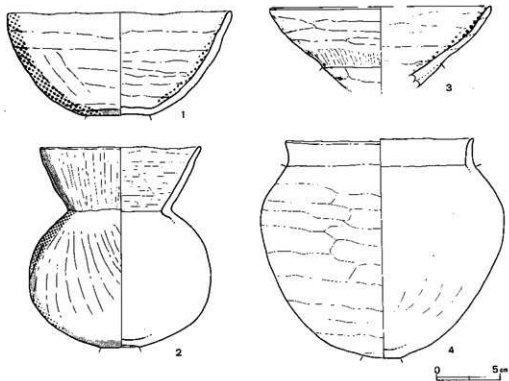
(3) 5号住の調査概要 (第1・16・17図 図版3・7)

本跡は、A3-5グリッドを中心に位置する。4号住に切られており北壁部分が欠落している。規模は、遺存している部分で2.8m×2.8mの方形である。主軸方位は、斜がないため明確ではないが、N-40°に偏っている。遺構の遺存状態は概ね良好である。覆土は暗褐色土を主体としている。床面までの深さは、18cm程度で、ソフトローム面を床面としている。床は、部分的に硬化部分が遺存するが、大半が軟弱である。壁は良好に遺存しており緩やかに立ちあがる。柱穴は、確認されなかった。ピットは2口確認されている。南壁コーナーのピットは、68cm×55cmの楕円形プランで、深さは、26cm、覆土は下から褐色土(黒色土粒少量含む)、暗褐色土(黒色土粒ローム粒混合層、若干焼土粒含む)、黒褐色土(ローム粒、黒色土粒混合層)となっている。もう1口のピットは、一部4号住に切られているが、52cm程度の円形?プラン、浅い皿状の掘り込みで深さは16cmを測る。覆土は、黒褐色土で炭化物を含んでいる。炉は確認されなかった。壁清も確認されなかった。その他、焼土が8~10cm程度、本跡中央部分からピット側の西壁付近に確認された。床面から4~6cm浮いている状態である。

遺物は、全体でも30点程度と少ない。ただそのほとんどが、床直に近い状態で出土している。完形遺物は、ピット際に横になった甕(16cm程度)1、中央部に高環1、南壁際に甕2、壺1が倒立した状態での出土、ピット内に小型壺1、中央部に正立した状態で埴1が出土している。この内4点について実測した。1は、上師器埴で完形である。数値は、口径17.0cm、器高8.0cm、底径5.0cmである。胎土は、長石、雲母、砂粒を混入する。色調は、淡赤褐色を呈する。口縁横などで、体部外面は横位、縦位へら削り、内面は、弱いへら削り調整を施す。内外面赤彩される。2は、壺で完形である。数値は、口径12.2cm、器高15.5cm、底径3.0cm、胴部最大径14.0cmを測る。色調は、淡赤褐色で内面はこけて剥離している。口縁部は、縦位、横位のへら磨きを施す。体部外面は、斜位のへら削りを施す。口縁~体部外面に赤彩を施す。出土状態は3コの倒立した内の1つである。3は、高環で、あとから脚部が接合することがわかった。半転した数値は、口径17.0cm、遺存高6.2cmを測る。胎土は、雲母、長石混入、色調は淡赤褐色を呈する。整形は、外面は、横位へら削り、縦位へら磨き、内面は、粗いへらなどで施す。内外面赤彩される。4は、甕で、倒立して出土した3点の1つである。完形で、口径14.2cm、器高17.0cm、底径3cmを測る。安定が悪い。色調は外面橙褐色、内面は、意図して行なったものか漆黒色を呈する。整形は、口縁部横などで、体部外面は、横位へら削りを施す。内面はへらなどでされる。



第16图 5号住平面图(S=1/6)

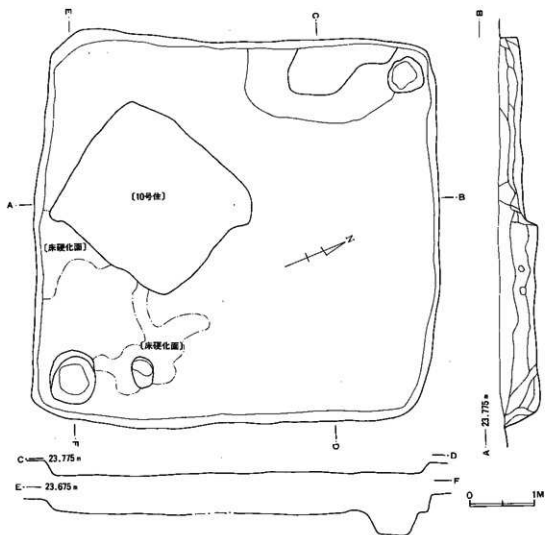


第17图 5号住遺物実測図(S=1/3)

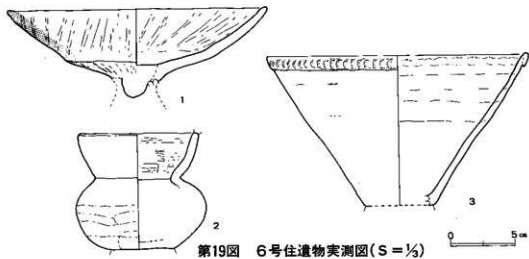
(4) 6号住の調査概要(第1・18・19図 図版4・7)

本跡は、A3-9、10、13、14グリッドに位置する。一部床面を10号住に切られている。規模は、5.8m×6.0mのほぼ方形を呈する。主軸方位は、砂がないため明確ではないが、N-24°Eである。遺構の遺存状態は、10号住に一部切られるがほぼ良好である。覆上は、下層において褐色土を主体とし、上層は暗褐色土を主体とする自然埋没である。床面までの深さは、30cm程度でソフトローム面を床面としている。床は、全体的に軟弱で部分的に硬化面が遺存する。壁は、良好に遺存しており緩やかに立ちあがる。柱穴は、1口確認された。48×30cmの楕円で深さは、20cmを測る。貯蔵穴と考えられるピットが2口確認された。北西コーナーのピットは、60×50cmの楕円で深さは、48cmを測る。覆上は、下層において焼土粒を含んだ層で上層は、暗褐色土(ローム粒、黒色土粒混合層)を呈する。底面より小型壺が出土している。南東コーナーのピットは、80×70cmの隅丸長方形を呈し深さは、35cmを測る。覆上は、中層において焼土を主体的に含んでおり、上層は黒褐色土を主体としている。が及び壁溝は確認されなかった。その他北西コーナーから西壁部分に2.4m×1.2mの範囲でテラス状の遺構が確認された。地山を削って構築されていた。また焼土が東壁中央より部分的に出土した。

遺物は、総数200点程度である。1は、高坏坏部でテラス状の遺構に直立状態で出土した。数値は、口径19.9cm、遺存高7.0cmを測る。胎土は、長石、雲母、砂粒混入で焼成は良好である。色調は、内外面とも茶褐色で焼成時の黒斑が見られる。整形は、内外面において木口状工具によるので調整後外面は、粗い縦位のヘラ磨き調整、内面は、粗い放射状のヘラ磨き調整を施す。突起状部分は、脚部と坏部のジョイント部分である。2は、平底の埴で西壁際より横状態で出土した。完形で口径8.7cm、器高9.0cm底径4.9cm、胴部径10.0cmを測る。胎土は、長石、雲母、砂粒を混入する。色調は、内外面とも淡褐色を呈する。整形は、外面中位から下部において横位ヘラ削り調整、内面は、口縁～頸部にかけて木口状工具ないしさざら状工具によるので調整を行っている。口唇部はコの字状を呈する。3は、鉢ないし瓶と考えられる遺物で40cmの広がり散らけて出土した。床から5-9cm浮いている。半転ではあるが、口径20.0cm、器高12.2cm、底径5.3を測る。胎土は、長石、石英を混入している。焼成は良好である。色調は、漆黒色で内面は、淡茶褐色を呈する。整形は、口唇部は複合口縁で貼付した粘土紐を指頭により押圧している。内外面ともなで整形を行っている。内面において輪積み痕が明瞭にのこっている。



第18图 6号住平面图(S=1/6)

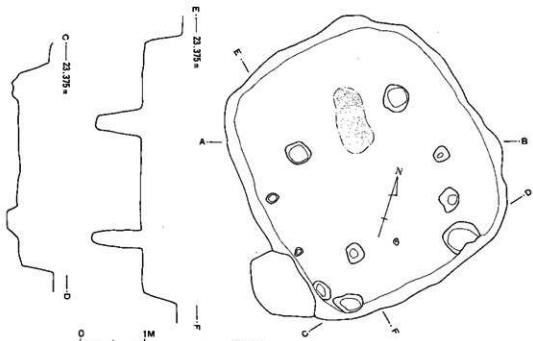


第19图 6号住遺物実測図(S=1/3)

(5) 7号住の調査概要(第1・20・21図 図版4・7)

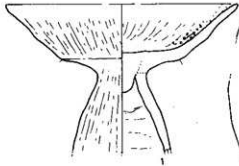
本跡は、B3-1、2、5、6グリッドに位置する。規模は、4.3×3.7mの隅丸長方形プランを呈す。主軸方位は、N-50°-Wである。遺構の遺存状態は良好である。覆上は、黒褐色土(ローム粒を含む)を主体とする自然埋没である。床面までの深さは、70cm程度でハードロームを若干掘り下げた高さである。地床である。床は全体的によく踏みこまれていて硬化している。壁の立ちあがりほぼ直立ぎみになっている。柱穴は、主柱穴が4口、副柱穴が6口確認された。主柱穴は、30~45cmの円形で深さは70~80cm程度である。副穴は、壁際に4口、他に2口で深さは、6~31cm程度の深さをもっている。主柱穴の内、炉側の2口については、立ちぐされの状態が看取できた。柱痕からの測定では19cmと21cmで片側の壁に寄って柱を立て掘り方内に、ロームとロームブロックを充填して柱を立てたと考えられる状況である。貯蔵穴と考えられるピットが、東壁北寄りに確認された。50×40cmの楕円で壁を切りこんでつくられている。深さは10cm程度である。覆土は、暗褐色土に焼土粒が若干混入されている。炉は、北側の2口を結ぶ線上中央にその中心部分が位置する。覆上は、黒褐色(焼土粒、焼土ブロック含む)上で皿状にほりくぼめられていた。底面は、北側部分でハードロームが強く焼けていた。

遺物は、全体では600点を越える点数であるが、そのほとんどが投棄されたものである。床面から40~60cm程度のレベルで出土したものが多く、特殊な遺物としては、滑石製剣形品4(完形1未成品2、破損1)、有孔円板2(2孔のもので完形2)、こぶし2つ大の軽石1、小片の軽石5などが出土している。これらの遺物についても滑石製品については、最上層での出土、こぶし大の軽石についても中層からの出土で、混入遺物である。以下の遺物についても混入遺物である。1は、高坏で、床面から30~50cm、2m程度散って出土している。数値は、半転実測であるが、口径17.8cm、遺存高11.4cmを測る。胎土は、雲母、長石を混入しち密である。色調は、外面は茶褐色で、内面は、赤彩されており淡赤褐色を呈する。焼成は良好である。整形は、内面は、口縁部横なで、体部は、斜方向のヘラ磨き調整を施す。外面は、坏部斜方向のヘラ磨き、脚部縦位のヘラ磨きを施す。2及び3は、接合していないが、同一個体である。床面から41~56cm浮いた状態で出土している。2は口径17.0cm、胴部径25.0cmを測る。胎土は長石を主に雲母、砂粒が混入されている。色調は、外面橙褐色、内面茶褐色を呈する。整形は、内外面ともなで調整を施す。なでは乾燥が進んだ段階に行ったもので石状のもので荒くなでている。ヘラ磨き状である。3の数値は、底径5.0cm、胴部径26.4cmを測る。

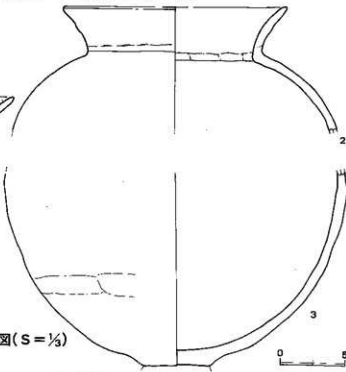


1. 黒褐色土 ローム粘土体中に含まれ地味あり。
2. 黒褐色土 黒色粘土層下のローム殻を穿ち。
3. 黒褐色土 2層に穿ち入り黒褐色土を含む。2-3mm大ローム殻の下の層に地味ありしまっている。
4. 黒褐色土 2-3mm大ローム殻の下の層に穿ち入り地味ありしまっている。
5. 黒褐色土 ローム殻黒色土の割合が2-3mm大ローム殻を穿ち。
6. 黒褐色土 ローム殻中体中に含まれ地味あり。
7. 褐色土 ローム殻土層の黒褐色土に地味あり。
8. 黒褐色土 1-2mm大ローム殻の下の層に穿ち入り黒褐色土の層に地味ありしまっている。
9. 黒褐色土 ローム殻土層の黒褐色土に地味ありしまっている。
10. 黒褐色土 ローム殻土層の黒褐色土に地味ありしまっている。
11. 黒褐色土 ローム殻土層の黒褐色土に地味ありしまっている。
12. 黒褐色土 ローム殻土層の黒褐色土に地味ありしまっている。
13. 黒褐色土 ローム殻土層の黒褐色土に地味ありしまっている。

第20図 7号住平面図 (S=1/60)



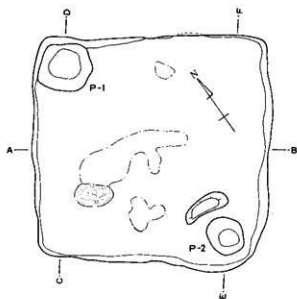
第21図 7号住遺物実測図 (S=1/3)



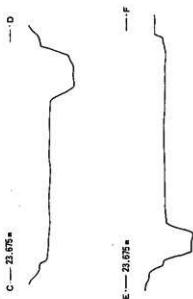
(6) 8号住の調査概要(第1・22・23図 図版5・7)

本跡は、A2-15、B2-3グリッドに位置する。規模は、3.5mの方形プランを呈する。遺構の遺存状態は良好である。覆土は、黒褐色土を主体とする自然埋没である。主軸方位は、N-62°-Wである。床面までの深さは、18cm程度でソフトローム層中を床面としている。床の硬化面は、部分的に遺存するが、概して軟弱な部分が多い。壁の立ちあがりはほぼ直立ぎみに立ちあがっている。柱穴は確認されなかった。貯蔵穴と考えられるピットが北西コーナー及び南東コーナーで確認されている。前者は、82×70cmの略長方形プランを呈し、覆土は、焼土粒、炭化粒を含む暗褐色土を上層に中層に焼土、下層にローム粒主体の褐色土となっている。深さは、25cmを測る。底面より遺物No.2、3とコブシ大の石1、小型煮1が出上している。後者のピットは、60×52cmの楕円プランで深さは、39cmを測る。覆土は、中層において焼土、上、下層に暗褐色土となっている。遺物は下層より4が出土している。またこのピットに隣接して土壇が遺存していた。ロームの削り出しで、5~6cmの高まりをもつ。炉は、西壁から1m、北西壁から80cm入った地点に30×60cmの規模で位置している。覆土は、赤褐色土(ローム粒全体的に含む)でほとんど掘り込みをもたない。底面もそれほど焼けた状態ではなかった。

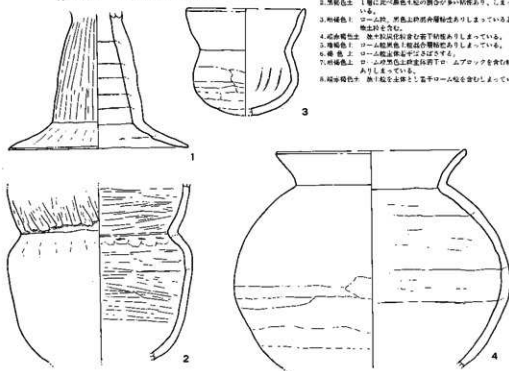
遺物は、100点程度である。出土位置は壁周辺に多く北西コーナー部分での出土がその中でも多い。特殊遺物としては、滑石製剣形品が床直で1点出土している。その他ピット内からの出土が見られる。1は、高坏脚部で壁際より倒れて出土した。数値は、裾部径13.7cm、残存高10.5cmを測る。胎土は、雲母主体に砂粒、長石を少量含む。色調は、淡褐色で整形は、裾部外面に粗いなで、脚部は、縦位の細いヘラ削りを施す。内面はなで調整をする。2は、口唇部と底部を欠損する甕である。数値は、頸部径12.0cm、胴部径14.1cm、遺存高13.5cmを測る。胎土には、長石がより多く含まれている。淡褐色を呈する。整形は、外面口縁部は粗い櫛状工具による斜方向の施文、内面は、同工具による横方向のなでを施す。3は、埴である。数値は、口径9.0cm、器高は8.3cmを測る。胎土は、長石、雲母、砂粒を混入する。色調は、淡茶褐色を呈する。整形は、口縁部横なで、体部外面中位~下部横位へラ削り、内面へらなでを施す。口縁~体部まで遺存。4は、甕で約2遺存する。口径は、14.4cm、残存高16.9cm、胴部径21.4cmを測る。胎土は、雲母主体に砂粒を少量含む。色調は、淡茶褐色を呈する。整形は、口縁部横なで、体部外面は中位より下位で横位へラ削り、上位はなで、内面はなで調整を行う。



第22図 8号住平面図 (S = 1/60)



1. 黒褐色土 ローム地黒色土粒結合層向上ブロック層下層をむきかきみ
らする。
2. 黒褐色土 1層に比し黒色土粒の割合が多い状態あり、しまっ
ている。
3. 暗褐色土 ローム地、褐色土粒結合層特性ありしまっている土
塊土粒を含む。
4. 灰赤褐色土 焼土粒同化層をむきかきみ下層をむきかきみ
み。
5. 暗褐色土 ローム地黒色土粒結合層ありしまっている。
6. 暗褐色土 ローム地土粒結合層をむきかきみ。
7. 暗褐色土 ローム地土粒結合層下ブロック層をむきかきみ
み。
8. 暗褐色土 焼土粒同化層と黒土ローム地をむきかきみ
み。

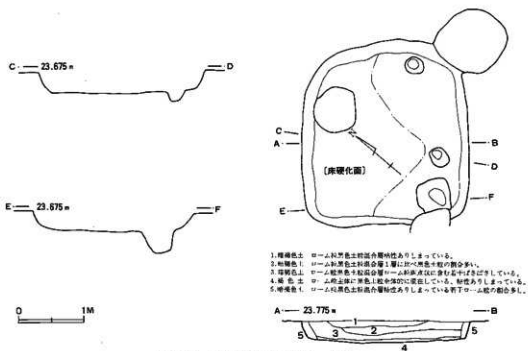


第23図 8号住遺物実測図 (S = 1/3)

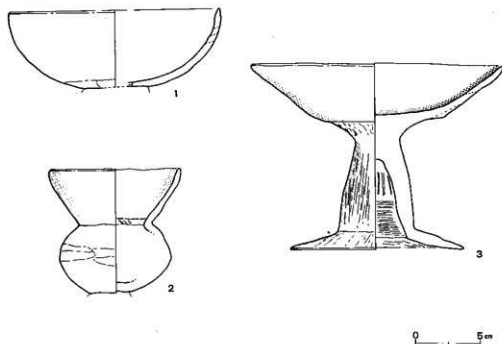
(7) 9号住の調査概要(第1・24・25図 図版5・7)

本跡は、A3-16グリッドに位置している。規模は、2.6×2.7mの若干東西に長い方形プランである。主軸方位は、塀がないため明確ではないが、N-46°-Eをさす。遺構の遺存状態は、3カ所において掘立柱掘り方に切られている。覆土は、暗褐色土を主体とした自然埋没である。床面までの深さは、30cm程度でソフトローム層中を床面としている。床の硬化範囲は、北側の半分において見られるが、明確に堅いという硬化範囲ではない。壁の立ちあがりは、緩やかに立ちあがっている。柱穴は、2口確認している。覆土は、黒褐色土(ローム粒、黒色土粒混合層)主体で、30cm程度で深さは、14cmと19cmである。また貯蔵用ピットが、西壁南側コーナーより確認された。一部カクランを受けるが、50cm程度の方形プランを呈する。深さは、30cmである。覆土は、暗褐色土を主体とする自然埋没の状況である。

遺物は、全体で60点程度出土している。南壁及び東壁際に多く出土した。1は、坑で30cm内外に散った状態で出土した。レベルは床直~11cmの範囲である。約号遺存する。口径は、16.0cm、器高6.0cm、底径6.0cmを測る。胎土は、長石、雲母、砂粒を含む。色調は内外面とも淡茶褐色を呈する。整形は、口縁部横などで、体部内外面についてねいなどで調整、体部外面下端において横方向のヘラ削り調整を施す。また内面において火熱を受けて若干剝離した状況が見られる。2は、坑で床面に倒立した状態で出土した。完形。数値は、口径10.0cm、器高9.6cm、底径3.0cmを測る。胎土は、長石、雲母、砂粒を混入する。色調は、内外面とも赤褐色を呈する。体部下位から内面の頸部まで赤彩されている。整形は、口縁部横などで、体部中位において横位ヘラ削り調整を施す。内面頸部においてヘラ削り調整を施す。3は、高環で壁際に環部と脚部に分かれて出土した。床から5cm浮いている。数値は口径19.4cm、器高14.5cm、脚部径13.4cmを測る。胎土は、長石、石英、雲母、砂粒混入、色調は内外面茶褐色を呈す。環部内外面及び脚部外面において赤彩されている。焼成は良好である。整形は、環部内外面などで調整、脚部内外面刷毛目調整後などで施している。環部内面において部分的に火熱を受けて剝離している部分がある。



第24図 9号住平面図(S=1/60)

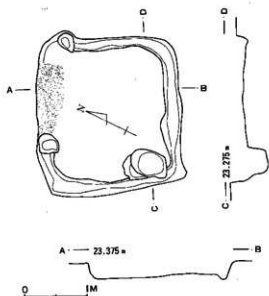


第25図 9号住遺物実測図(S=1/3)

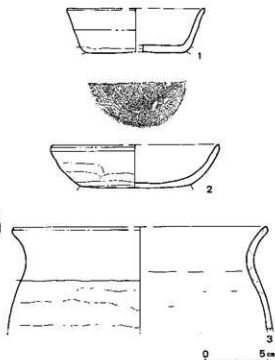
(8) 10号住の調査概要 (第1・26~28図 図版6・7)

本跡は、A3-10、14グリッドを中心に位置する。規模は、2.1×2.1mの方形プランを早す。主軸方位は、N-20°-Wをさす。遺構の遺存状態は、概ね良好である。覆上は、暗褐色土を主体とした自然埋没である。床面までの深さは、22~24cmを測る。床面は、ハードローンを若干掘りさげて床面としている。床は小さな凹凸が多く壁際際では軟弱な部分も見られる。壁の立ちあがりも部分的に木根等によるカクランを受けている。緩やかに立ちあがっている。壁溝は、北壁東コーナーで立ちあがる他かは、周回する。幅は、16~24cmでU字状の断面をもつ。深さは、8~10cm程度である。柱穴は、壁際に2口確認している。暗褐色土を主体とした覆上で深さは、40~43cm程度である。その他ピットを西壁南コーナーで確認している。覆土は、暗褐色土+ロームブロックを主体とする層で深さは30cm程度を測る。カマドは、北壁中央に構築されている。袖部の構築上は、淡褐色砂質土を主としている。煙道部末端は、別のピットによりこわされている。煙道部は、壁を20cm以上削ってつくられている。明確な火床部は、確認できなかった。

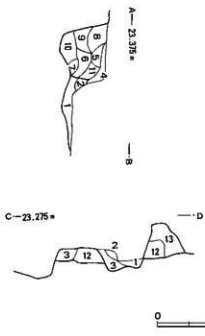
遺物は、全体で150点程度出土しているが、東壁及び北壁と中央部分での出土が多い。総体的には混入遺物が多い状況である。1は、坏で床から2cm程度浮いた状態で出土した。約寸強遺存する。口径は、11.0cm、器高は3.5cm、底径は8.1cmを測る。ロクロを使用している。胎土は、石英、長石、砂粒を少量含む。色調は淡橙褐色を呈する。焼成は良好である。整形は、口縁部横なで体部下端回転へら削り調整、底部の切り離しは回転糸切りでへら削り調整を行っている。2は、坏で床から7cm浮いた状態で出土した。約寸強遺存する。口径13.4cm、器高3.5cm、底径8.7cmを測る。胎土は、雲母、長石、砂粒を混入する。色調は、内外面黒褐色である。煤が付着しているが、二次焼成時のものではない。整形は、体部外面中位~下端にかけて横位へら削り調整を施す。内面はなで調整を施す。口唇部はやや内湾ぎみに立ちあがる。横なでしている。また底部及び口縁部において二次焼成による剝離が見られる。3は、甕で床面から30~35cm浮いて出土した。約寸遺存する。口径20.0cm、遺存高8.2cm、胴部径21.1cmを測る。胎土は、長石、雲母、砂粒を混入する。色調は、淡茶褐色を呈する。焼成は、良好である。整形は、口縁部横なで、体部外面弱いへら削り調整、内面は、なで調整を行う。体部と口縁部を区切って弱い稜が見られる。



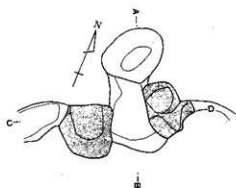
第26図 10号住平面図(S=1/6)



第27図 10号住遺物実測図(S=1/6)



第28図 10号住カマド平面(S=1/6)

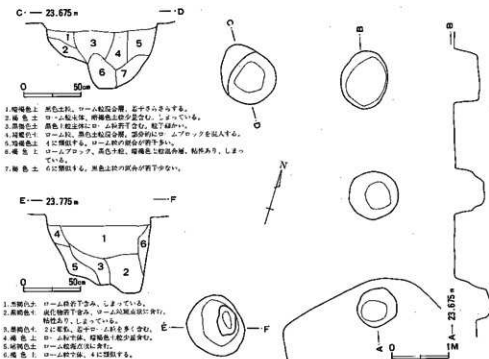


1. 褐色土 暗褐色土砂状土粒域上ブロック散在。
2. 暗褐色土 暗褐色土粒状土。
3. 赤褐色土 赤色土を主体としロームブロックを含み微土粒少量を含む。
4. 灰褐色土 淡黄色砂質土粒少量を含む。
5. 暗褐色土 褐色土、ローム粒土粒上粒少量を含み微細砂質土上を主体とする。
6. 暗褐色土 ローム粒土粒上粒少量を含む。
7. 褐色土 ローム粒を主体としロームブロックを含む。
8. 暗褐色土 褐色土粒状土にローム粒を含み微細砂質土少量を含む。
9. 暗褐色土 8層と類似するが褐色土粒の割合が少い。
10. 褐色土 ローム粒暗褐色土粒状土層中よりほそぼそとする。
11. 暗褐色土 褐色土粒ローム粒砂質土層中よりほそぼそとする。
12. 暗褐色土 砂質土粒を主体とする。
13. 淡褐色土 砂質土粒及び暗褐色土粒を含む。

(9) 1号掘立柱遺構の調査概要 (第1・29図 図版6)

本跡は、A3-16グリッドを中心に位置する。2間×1間以上の規模を有する。調査区外に遺構がのびているため明確ではない。主軸方位は、南北棟と仮定すればN-70°-Eとなる。柱間寸法は、南北で2.0m、東西で2.7mを測る。柱掘り方の規模は、0.7m~1.1mで深さは70~80cmを測る。プランは、ほぼ円形を呈する。掘り方セクションでは、立ちくされの状況が見られる。版築土には、暗褐色土粒とロームを併用して使用しておりしまった互層をなしている。

遺物は、小片のため図示し得ないが、須恵器甕体部片、常陸型甕の口縁部片などが出土している。

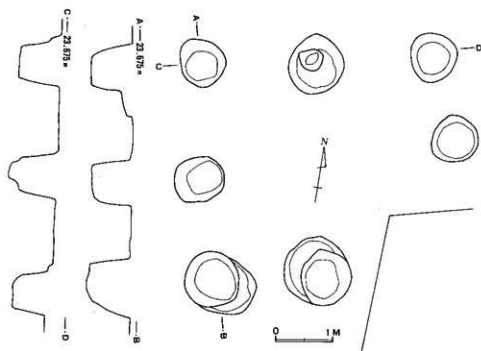


第29図 1号掘立柱遺構平面図(S=1/6)

⑩ 2号掘立柱遺構の調査概要 (第1・30図 図版6)

本跡は、A 3-15、16グリッド、B 3-3グリッドに位置する。桁行2間、梁間2間の南北棟の建物である。掘り方・口が未検出であるが、おそらく上記の規模として良いと思う。主軸方位は、N-14°-Wをさしている。柱間寸法は、桁行で2.1m、梁間1.95mを測る。柱掘り方の規模は、80-100cmのほぼ円形で深さは、70-82cmを測る。掘り方セクションにおいては、版築土の状況は下層に暗褐色土を充填して上層に褐色土を積みあげる場合とその逆の場合が見られる。

遺物は、図示し得ないが、底部に「×」のカマ印をもつ須恵器坏底部片、須恵器蓋の小片などが見られる。

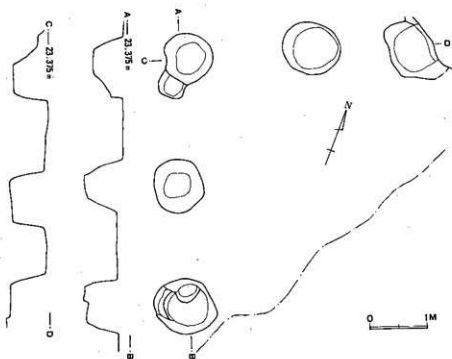


第30図 2号掘立柱遺構平面図 (S=1/40)

(1) 3号掘立柱遺構の調査概要 (第1・31図 図版6)

本跡は、B3-2、3グリッドに位置する。規模は調査外に及ぶため明確ではないが、2間以上×2間以上の規模を有する。主軸方位は南北棟とした場合N-68°-Eをさす。柱間寸法は、南北方向で2.2m、東西方向で2mを測る。柱掘り方の規模は、90-100cmの円形ないしは、楕円形プランを早す。深さは、50-60cmを測る。

遺物は、図示し得ないが、土師器器体部片などが見られる。



第31図 3号掘立柱遺構平面図(S=1/50)

(12) まとめ

今回行った本調査において検出した遺構は、竪穴式住居跡8軒、掘立柱遺構3棟である。竪穴式住居跡は、弥生後期～古墳時代前期のもの2軒、古墳時代中期のもの4軒、平安時代のもの2軒である。以下時代別に記すこととした。3号住及び7号住は、弥生～古墳時代にかけての時期と考えている。両者とも混入遺物のみで該期にかかる遺物はわずかに3号住の3のみが該当するようである。ただ昨年度調査した2号住との柱穴や掘り方など遺構要素を比較してみた場合、似ている状況がでてくる。主軸方位、炉の位置、貯蔵穴の形状、深さ、壁、床面の状態などである。2号住については、遺物は印手系の甕や赤彩された壺、無文の甕等が出土している。こうした状況を踏まえて当該期の所産と考えている。古墳時代中期の遺構は、5、6、8、9号住の4軒と考えている。規模は、2.7～2.8mのもの2軒、3.5mのもの1軒、6mのもの1軒となる。この内炉のあるものは8号住の1軒のみでこれについてもそう使いこんでいる状況ではない。柱穴についても主柱穴と考えられるものは、床面をさらに掘って精査しても確認されなかった。貯蔵用ピットはどの住居跡とも1ないし2カ所つくられている。6、8号住では対角線上のコーナーにつくられている。規模はいずれも60～80cm程度の楕円プランで完形ないし半完形の遺物が下層より出土している。その他か5、6、8号住では、部分的に焼土の痕跡が見られる。床直ないしそれに近い状況での出土である。また貯蔵穴下層において焼土の堆積が見られる。火災といった性格よりも局部的な火の使用といった状況といえる。平安時代の遺構は、4、10号住である。昨年度調査した1号住も含めて3軒となる。カマド位置は、北及び東壁中央につくられている。主柱穴は、10号住においては確認されなかった。掘立柱遺構は、主軸方位は、N-70°-Eの方向でおおむね軒すじをそろえている。柱の掘り方は、0.7～1.0mの規模ではほぼ円形ないし楕円形プランを呈している。4、10号住居跡との主軸方位では、10号住と近似した傾向を示す。

遺物は、特殊遺物では軽石製の浮き子が3号住覆土から出土、滑石製剣形品、有孔円板が7号住覆土及び8号住床面から出土している。浮き子は、古墳時代中期の所産と考えている。7号住の覆土から軽石が出土しているが、本跡の投棄遺物がほとんど該期のものだからである。剣形品及び有孔円板は、未成品及び破損品を含むためその廃棄パターンに意味づけはできないと思われる。報文の出土土器については、3号住の2、4号住の2、10号住の2、8号住の2についていささか様相を異にしている。

図版1 下高野新山遺跡



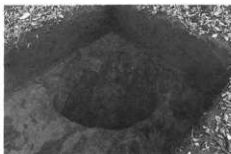
発掘風景



ビット確認状況



層 序



ビット完掘状況



ビット完掘状況

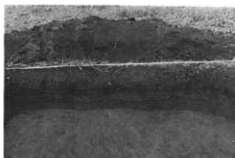


出土遺物

図版2 西山遺跡



グリッド設定状況



層 序



掘り下げ状況



Jグリッドプラン確認状況



Bグリッドプラン確認状況



グリッド完掘状況

図版3 菅地ノ台遺跡



3号住遺物出土状況



3号住全景



4号住全景



4、5号住全景



4号住遺物出土状況



5号住2、4出土状況

図版4 菅地ノ台遺跡



6号住遺物出土状況



6号住No.2出土状況



6号住完掘状況



8号住ピット内遺物



7号住遺物出土状況



7号住完掘状況

図版5 菅地ノ台遺跡



8号住遺物出土状況



8号住完掘状況



9号住完掘状況



9号住遺物出土状況



9号住遺物出土状況



9号住No.3出土状況

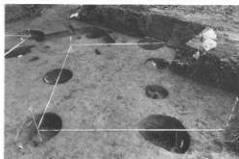
図版6 菅地ノ台遺跡



10号住全景



10号住遺物出土状況



1号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡

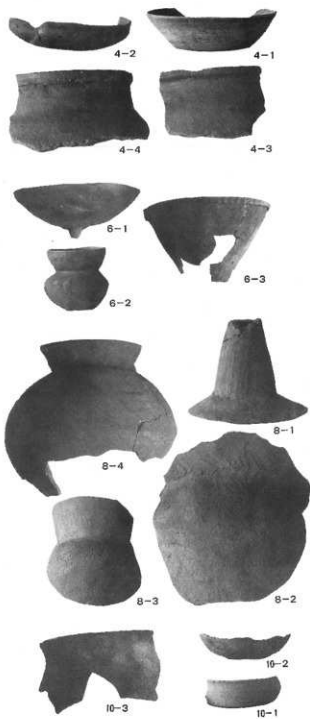
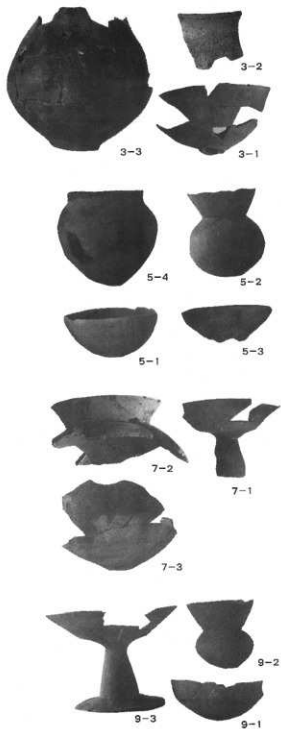


3号掘立柱建物跡



遺跡全景

図版7 菅地ノ台遺跡



調 査 組 織

調査主体者 大熊章一（八千代市教育委員会教育長）

事 務 局 伊藤勇毅（八千代市教育委員会社会教育課長）

菊島一利（ " " 文化係長）

木原善和（ " " 主事）

小平浩子（ " " 主事）

調査担当者 森 電哉（ " " 主事）

作 業 員 近藤重夫・佐久間高・永野友市・永野むつ・宮嶋菊江・牧野四郎・山中文一
米元タミ・吉橋勇吉・杉野きぬ・斉藤一夫・牧野定吉・山中こと・大鐘衣子
宇野和子・小室高恵・柴山栄子・拝詞妙子・山本みつ江・吉田よね子・長岡スズ
花鳥あやめ・長岡まさ子・金子はる・橋本富四郎・長岡宣雄・深沢はる
斉藤俊江・花鳥のぶ・笠川明子・花鳥とき・周郷ち似子・矢鳥榮次・生貝清子
田中みね子・長岡かつ・宮腰和子・斉藤節子・鈴木喜久子・藤井みどり
山田茂子

整 理 員 宮腰和子・鈴木喜久子・斉藤節子・藤井みどり・生貝清子・田中みね子・
磯江公子

千葉県 八千代市
市内遺跡群発掘調査報告

印刷日 1990年3月26日

発行日 1990年3月31日

発行 八千代市教育委員会

印刷 三好印刷(株)